2 月 12 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　5：　12 – 26

「罪を赦す権威」

「病は気から」と言われます。「もうあかんのと違うか」と思うとき、実際に体調が悪くなります。一方、「イケてる」と思えば、期待以上に体を軽く感じることもあるでしょう。もちろん、現代科学は様々な病の原因を探り当ててきましたから、対症療法が確立しているものもたくさんあります。それでも、原因が特定できなければ……

聖書では、病の原因の多くは悪魔やサタンに求められます(「サタンはヨブに手を下し、頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。」ヨブ記 2:7)。あるいは、本人かその両親にその原因を求めることもありました(「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」ヨハネによる福音書 9:2)。

そして、いざ病気になったら、自然治癒を待つか、民間療法に頼るか、あるいは奇跡を待ち望むか(「彼らは、水が動くのを待っていた。それは、……水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病気にかかっていても、いやされたからである。」ヨハネによる福音書 5:3)。残された選択肢は多くありませんでした。その中で、心がすさみ、神を呪う者もあったことでしょう(「彼の妻は、『どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう』と言った」ヨブ記 2:9)。

イエスはそのような者たちの傍らに、常に共におられます。そして、神の力によって多くの人を癒されるのです(「イエスが手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。」ルカによる福音書 5:13)。

にわかには信じがたいことですが、確かにそのことは起こったと聖書は記しています。そればかりか、イエスの名前だけでも病が癒されたとさえ言うのです(「ペトロは言った。『わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。』」使徒言行録 3:6)。

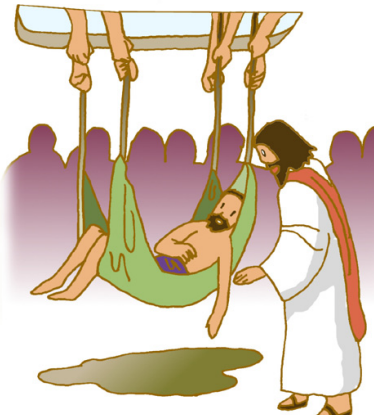
正直、なんとうらやましいことでしょう。現代に生きる私たちには、そのような奇跡は期待できないのか、と諦めてしまいそうになります。事実、「信じれば癒される」と勝手に期待して教会に来た人を何度見送ったことでしょうか。

しかし、今ならわかるのです。大切なことは、病そのものが癒されることではないのだ、と(「ヨブは答えた。『お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。』」ヨブ記 2:10)。無論、癒していただけるならば、それに越したことはありません。それよりももっと大切なことは、たとえどのような状況であっても、私は神に愛されているという事実なのです。

「癒されないのは私の罪のためだ」と責める人々に向かってイエスは言われます。

「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」(ルカによる福音書 5:24)

神は、イエスをして「命を命として全うすることの大切さ」を伝えてくださっています(「主はお前の罪をことごとく赦し／病をすべて癒し／命を墓から贖い出してくださる。」詩編 103:3-4)。たとえ病を与えられようとも、たとえ苦しみの連続としか思えない人生であっても、全て神の御手の内に置かれています。自分を責める必要などみじんも無いのです。



「無病息災」だけが幸福なのではありません。どのような状態でも神が私を認めてくださっている。神が私を愛してくださっている。その事実が私を癒し、安心させてくださるのです。「一病息災」「多病息災」と心を軽くしてくださるのです。

病の時も、健やかな時も、神と共にあることに改めて感謝しましょう。